

(写真) こぶしの里の新緑を背に、笑顔を見せる古寺貞之さん。来場者への想いは、場内の清掃や緑保全を行う保存会への活動につながっています。

地域を盛り上げ
こどもの川で川遊びをする
子どもたちの姿を見たい。

大好きだから。子どもたちに自分たちが暮らす三芳町竹間沢には、ホタルが舞う自然と緑に囲まれた場所があることを、幼虫放流という機会でも知ってもらえればと思います」と話し、「子どもたちが大人になったら故郷を想う日が来ます。そのとき、ホタルが舞う里がある町で暮らし、遊んだ思い出が蘇るでしょう。そして故郷に帰ろうとなったとき、自然も緑もなかったら愕然となると思いますが、そうならないように、故郷を愛し、ずっとホタルが舞う自然を守ろうと思う気持ちで、ホタルの幼虫放流で芽生えることを期待しています」と続け、視線を落としました。

視線の先にあったのは、こぶしの里の脇を流れる「こどもの川」。「昔はこの川で魚釣り大会をしていました。もつと竹間沢という地域を盛り上げたい。今は泥が溜まって川に入れません、こぶしの里やこどもの川をもつと綺麗にして、こどもの川で子どもたちが水遊びをする姿を見たいです」とザリガニ釣りに熱中する子どもたちを、昔を懐かしむような表情で見つめながら話しました。

①ホタルの幼虫が入った紙コップを恐る恐る手にする児童たち。
②幼虫放流前、児童にどうやって成虫になるのか、餌は何かなどを説明。③また会う約束をし、沢に幼虫を放つ。④昭和30年代の田んぼが広がる竹間沢。ホタルが無数に飛んでいた時代を懐かしみながら、丁寧に説明する古寺さん。



竹間沢小学校の児童たちにホタルの生態について説明する古寺さん。児童からは「幼虫は何を食べるの?」「カワニナって何?」など、ホタルに関する質問がたくさん飛び交った。

初 夏になるとカワセミが訪れるこぶしの里。昼間は多様な虫が生息し、様々な植物が生い茂るなど、散策や自然観察にはびつたりな場所。しかし夜になると、美しいホタルの光が舞う華やかな『舞台』へと変貌します。

「昔は家に入りこんできたホタルを、蚊帳に入れて観賞していたんです」と生まれ育った竹間沢の思い出を話す、竹間沢ほたる育成会会長の古寺貞之(71)さん。しかし、故郷を照らしていたホタルの光は、昭和40年代を境に、消えてしまいました。

ホタルの光、再び

—愛する竹間沢に
もう一度ホタルの光を—
同じ志を持つ地域の皆さんが集まり、平成14年に「竹間沢ほたる育成会」が誕生しました。ホタル観賞ができる全国各所を巡り、どのようにしたら、自然の中でホタルが飛ぶのか研究を重ねました。「ホタルの幼虫が食べるカワニナという貝は、きれいな水でないと育ちません。そこで、こぶしの里の環境整備をすることから始め

竹間沢ほたる育成会

故郷を愛し、故郷を照らす。

故郷をホタルの光が照らしていた少年時代。その光を今に伝える活動をしている竹間沢ほたる育成会会長の古寺貞之さんにお話を伺いました。



⑤コップに小分けにされたホタルの幼虫。「ホタルは卵や幼虫、さなぎの時も光るんですよ」と古寺さんが児童に説明。幼虫はてんとう虫の幼虫を大きくしたような形をしている。⑥幼虫を手のひらに乗せる児童。「ぶにぶにして可愛いね」と優しい声を幼虫にかける。

「それでも私にとって、40年ぶりの再会。子どもたちの思い出がよみがえってきました。とても小さな光でしたが、故郷をホタルの光が照らす光景は、今でも目に焼き付いています」。やがて想いは、未来を担う子どもたちに向けられるようになりました。

平成18年から地元竹間沢小学校の4年生の児童に、毎年ホタルの幼虫をこぶしの里の沢に放流する活動を開始。「私が子どものころの思い出を再現したいと思ったのは、自然豊かな故郷、竹間沢が



竹間沢の子どもたちにとって、こぶしの里はザリガニ釣りができる遊び場所。自然の中で遊べる環境が町内にもある。